大すきいっぱい西北の子

～学びづくり、くらしづくり、仲間づくり～

令和７年５月９日
長崎市立西北小学校
文責：校長　江原芳樹
Ｒ７年度　第２号

「山は夏に形を成す」と言います。この５月の時期、山に目をやると、それぞれの樹々が、それぞれの緑を見せています。萌黄色、若苗色、若草色、柳葉色、青竹色、常盤緑、松葉色、裏葉色、とくさ色、千歳緑などなど、緑系の色の表現の豊かさにも頷けます。山はそれぞれの緑の共演により、さながらパッチワークのようです。今は、それぞれがそれぞれの色を主張していますが、次第にどの樹々も濃い緑をまとい、山は一つの大きくて濃い緑の形を成していきます。

学校の集団づくりの様子とも重なります。新しい学級集団、学年集団が始まり、少しよそ行きの様子だった子どもたちも５月になり、次第に自分の色を出し始めています。自分の色を出せるというのは、集団への安心感でもあります。そうした姿が運動会など集団との協力を通して、次第に一人ひとりが学級集団の一員として安定し、学級としての形を成していきます。これからが本当の「くらしづくり」「仲間づくり」の始まりです。

ご理解ください

西北小学校では、昨年度より時代に即した対応になるようにと、学校の徴収金を学校口座振込でお願いをしていました。子どもたちが、高額な現金を持って登校することのないようにすることもねらいの一つです。

すでにご承知のことと思いますが、今年度より長崎市において全市的に徴収金制度が導入されることとなりました。この長崎徴収金制度は、一年間を通して徴収する必要のあるものを前後期の２回に分けて徴収することとなっています。具体的には、テストやドリルのような年間を通して使用するものや、Qubena の年間使用料が想定されています。学年によっては、必要に応じて教科の教材（例えば理科の教材など）を購入することがありますが、この場合は長崎市の徴収金制度を活用することができません。

そこで、西北小学校では、長崎市の学校徴収金制度とこれまでの学校振込口座を併用して活用したいと考えています。

長崎市学校徴収金制度は、５月と９月に徴収が行われる予定です。併せて、学年によっては学期末に徴収をお願いすることがあります。これまでよりも、徴収の回数が増える可能性がありますが、ご理解ご協力いただきますようお願いします。

運動会応援団長、副団長認定証

５月２５日（日）は、運動会です。今、学校では運動会に向けた練習が始まり、日に日に、活気が高まっているところです。運動会を苦手としている子どももいますが、それでもみんなで「本番で一番成長した姿を見せよう！」と取り組んでいるところです。

５月１４日（水）には代表委員会があります。一昨年度は「西北魂」が、昨年度は「闘志」がキーワードでした。どちらもやる気が高まるキーワードです。今年の運動会テーマ

は、どんな言葉がキーワードになるでしょうか。

さて、運動会では赤・青・黄の３色に分かれ、色対抗で行われます。今年は２年生が２学級のため、黄組が５学級での縦割り色集団となります。得点種目については、２年生の２学級の得点の平均を割り当てるようにしています。今年は少し変則的な構成とはなりますが、６年生の応援団長を中心に、優勝を目指していくことは変わりません。

今年も６年生の応援団長、副団長が決まりました。運動会の印象は、応援団によって左右されると言っても過言ではありません。本番だけでなく、これから色別で応援の練習を重ねていきながら、士気を高めていくことで、「本番で一番成長した姿を見せよう！」という目標が具体的なものとなります。そこで、各色の応援団長と副団長に、運動会の成功を託す意味から「応援団長認定証」「応援副団長認定証」をそれぞれ渡しました。大いに運動会を盛り上げ、西北っ子の高まりを表現してくれるものと思います。ご期待ください。

赤組応援団長・副団長

青組応援団長・副団長

貴組応援団長・副団長

《校長散歩道　No.２２》

仏教には「愛語」という言葉があります。これは「人に対して、親しみのある心のこもった言葉をかけなさい」という教えです。私たちの身近にある言葉では「挨拶」がこれにあたるでしょうか。朝から立哨をしていると、１年生の挨拶の様子が変化してきたことを感じます。自分から、元気に挨拶している姿は、他者に気持ちを向けられるほど、自身が満ちていることを示しています。その表情は明るさを放ち、高いエネルギーを感じます。

私には挨拶が大きな力をもっていることを強く実感した経験があります。五島の富江小学校での経験です。５年生のＡ児が地域のゴミが多いことが気になり、ゴミ拾いをしたいと言い出しました。学級全体に提案し、登校時や登校してから学校周辺のゴミ拾い活動に取り組みました。始めた頃は、ごみを拾うことに注力しているため、またごみの多くは大人が出していることが分かり、大人への不満が少なからずあったため、あまり挨拶ができていませんでした。６年生になっても活動は継続しました。ただ、「６年生になって、活動のレベルアップをしよう。」と地域の方に自分たちから挨拶をしようとなりました。それからです。子どもたちが挨拶をすると、地域の方からも積極的に挨拶されるようになりました。それに伴いゴミ拾いの活動への評価も高まっていき、地域の広報誌に載ったり、その年の秋には長崎新聞の地方面に大きく写真入りで紹介されたりしました。すべて、地域の方の働きかけです。変わったのは地域の方の目だけではありません。やや消極的な面が強かった子どもたちには、何事にも自分から取り組もうとする姿勢が身に付いていきました。

挨拶は相手に対する小さな言葉の施しです。そんな言葉の施しが、いつも子どもたちの生活に生きていてほしいと願います。まず、私たち大人がその手本を示したいものです。